元禄絵巻

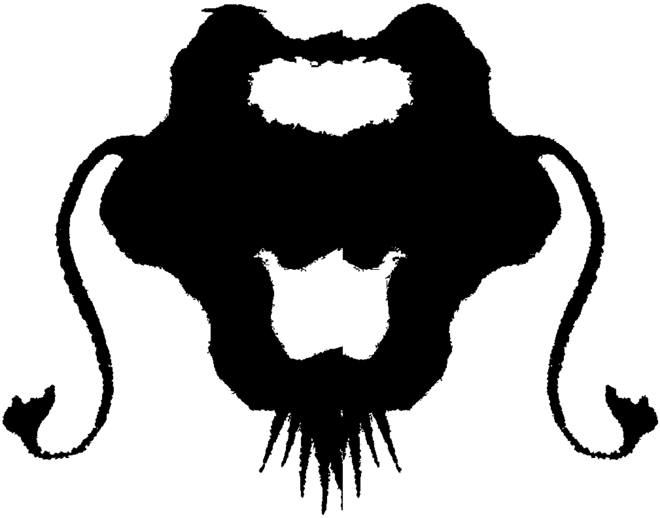
南條範夫

桃源社

南條範夫

元禄絵巻

桃源社・刊



〈検印省略〉

元禄絵巻　定価　七八〇円

著者　南條範夫

昭和四十九年十一月一日　印刷
昭和四十九年十一月五日　発行

発行者　矢貴東司
印刷所　堀内印刷
発行所　東京都中央区日本橋蠣殻町一丁目
十二番地　株式会社　桃源社

（分）0093（製）174107（出）5180

1974 ©

目次

柳沢殿の内意 5
世継物語 59
犬医師と犬寺 113
浪士慕情 147
下馬将軍 183

装幀　村上　豊
挿絵　東　啓三郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

元禄絵巻

柳沢殿の内意

一

「昨日、家の娘たちが歌舞伎座に行って忠臣蔵を見てきたがね、竹之丞の師直(もろなお)、扇雀の判官とおかる二役、猿之助の若狭助(わかさのすけ)、延若の勘平という顔ぶれだ」
「若手総出の豪華版じゃないか」
「ところが、娘は二人とも、初めのうち少しみていただけで、あとは居眠りしていたらしい。後でやった猿之助の黒塚の方が、はるかに面白かったと云っている」
「忠臣蔵も、若い世代にはもうピンとこないのかな」
「そうらしい。殿中松の間の刃傷のところで、ばかばかしくなってしまったそうだ」
「一番緊張するはずの場面じゃないか」
「いや、娘に云わすと、判官、つまり浅野内匠頭(たくみのかみ)長矩というトノサマは、神経衰弱に違いないと

云うのだ。どんな意地悪をされたか知らないが、あんな老人に刀で斬りつけるなんて、少々ばか

か、精神病としか考えられないと云うのだ」

「余り利巧じゃなかったことはたしかだろう、それに、勅使饗応で少々神経質になっていて、ノイローゼ気味だったことも間違いないのじゃないかね」

「いや、内匠頭という男、決してばかではなかったと思うね」

「どうしてだ」

「君は土芥寇讎記という本を知っているかい」

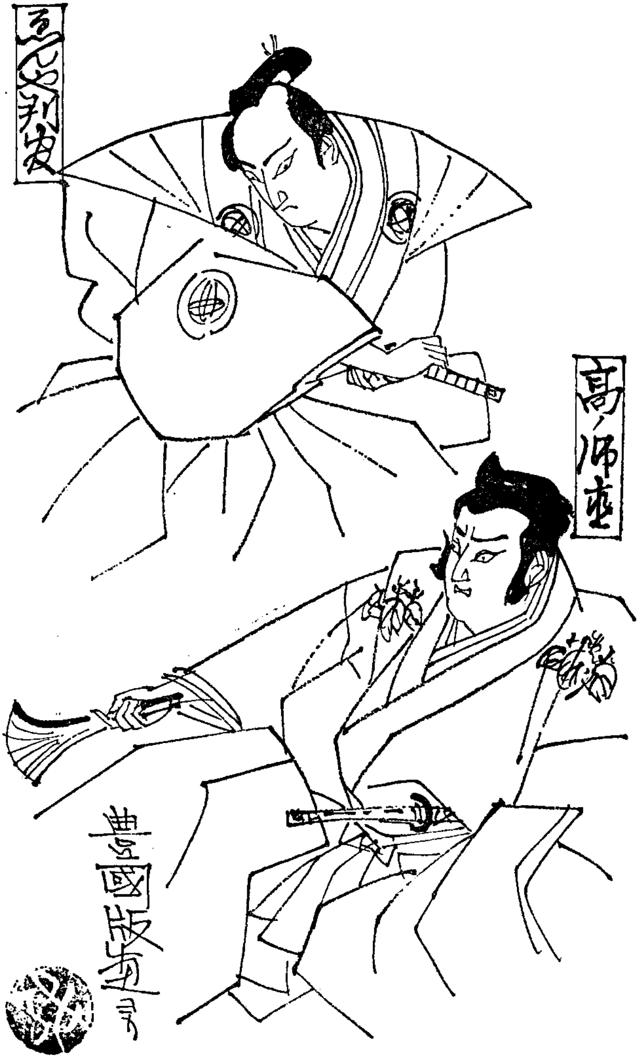
「ドカイコウシュウキ——ばかにむつかしい名の本だね、一向に知らん」

「これは元禄年間に、幕府当局が諸国に放った隠密の報告にもとづいて作ったものだがね、二百四十二名の大名について、領内の情況、大名の性格、民政についての噂などを記したものだ」

「へーえ、スパイの報告書か、そんなものが残っていたのかね」

「その中の浅野内匠頭源長矩の項に次のように記されている。内匠頭二十三歳の時らしいがね——。居城播州之内赤穂、本知五万三千石、米ヨク生ス。払ヒ上ナリ、地ニ禽獣魚柴薪多シ、土地上ナリ、家民豊ナリ、物毎自由カナヒ宜シキ所ナリ、長矩智有リテ利発ナリ、家民ノ仕置モヨロシキ故ニ、士モ百姓モ豊ナリ——」

「ばかに賞めてあるね」


高ノ師直

「智有って利発なりと云うのだから、ばかでないことは明白だろう。その上、家民の仕置きがよいから、士も百姓も豊かだと云う。まず名君の中にはいるはずじゃないか」

「家来思いの名君が、こらえこらえし十四日——というやつだね」

「ところが、このあとがいけない」

「何と書いてあるのだ」

「女色ヲ好ムコト切ナリ、昼夜閨門ニアッテ戯レ云々——とある」

「へーえ、色好みは、師直（もろなお）——いや、吉良上野介義央（こうずけのすけよしなか）の方じゃなかったのかね」

「芝居ではそうなっている。しかし、師直が顔世御前に惚れた。つまり上野介が内匠頭の妻室に横れんぼしたなどというのは、勿論、全くのでたらめだ」

「それは、そうだろう。顔をみる機会などあるはずがないしね。まして入浴中をノゾいたなどというのはでたらめに決まっている。しかし、美少年をとりあって恨みを含んだというような説もあるね」

「それも、でたらめだ。要するに色情の点で何かあったとすれば、六十何歳の老人の上野介よりもむしろ、女色ヲ好ムコト切ナリと云われた青年内匠頭の方にこそ問題があっただろうね。だが、この点については、無責任なつくり話以外には何も証拠はない。そして、この点について免罪ということにすれば、内匠頭はまず、大名としては、賢明な方に入れてよいと云うことになる」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「では、やっぱり、ノイローゼだったというわけかね」
「ノイローゼ気味だったことは否定できないな、人並みの頭をもった男が、平静な精神状態の時に、人に斬りつけたりするはずはないからね。しかし、そのノイローゼの原因が問題なのだ」
「それは、勅使饗応の——」
「ちがうね」
「なぜだ」
「勅使饗応は毎年のことだ、五代将軍綱吉の代になってからでも、あの元禄十四年の刃傷の年まで二十数回やっている。大体のことは分かっているはずだし、そんなにむつかしいことではないはずだ、内匠頭の相役の伊予吉田城主伊達宗春は、十九歳の若さで無事につとめている」
「それは、賄賂を十分に利かせたからだろう」
「内匠頭自身、天和三年即ち十八年も前にちゃんとこの勅使饗応の役をつとめている。十七歳の時にやったと同じことを、三十五歳になってからもう一度やるのに、何から何まで、上野介の指示を受けなければできぬというはずはない。賢明で利発とまで云われた内匠頭ではないか」
「それにしても、議事進行上、殊更に意地の悪いことをされれば、やりにくいだろう」
「上野介が特に欲張りで、賄賂の高によって、むちゃくちゃなことをすればそうかも知れん。しかし、上野介も高家筆頭として長い間その地位を保ってきた男だ。他人目にもはっきり分かるほ

ど、ばかげた意地悪はしなかったろうし、出来る筋合いでもないだろう」
「ばかに上野介の肩を持つね」
「実は私も、かつては上野介貪欲説をとっていた。そして、内匠頭の失敗は、彼が、もしくは彼の家老たちが、刻々に変わる世情にうとかったことに原因があると考えていたよ」
「それは、どういうことかね」
「内匠頭が天和三年、十七歳で第一回の勅使饗応役を承った時、江戸家老から、金三十両を上野介のところに持って行っている」
「ほう、内匠頭も、やっぱり、賄賂をもって行ったのか」
「賄賂といえば賄賂だが、まあ、よろしく頼むという挨拶料だ。高家などというものは、禄高は少ないし、こうした謝礼が収入源なのだから、一概に賄賂というのも可哀そうだがね」
「で、元禄十四年の二度目の饗応役を仰せつかった時、内匠頭は、持ってゆかなかったのかね」
「いや、前回通り三十両持って行った」
「それなら、上野介、ふくれる必要はないじゃないか」
「それが、世情にうといと云うのだ。いいかね、天和三年には米一石銀四十五匁だ。元禄十四年にはそれが一石銀九十三匁になっている。元禄と云えば、インフレーション時代の代名詞にしてもいいくらいなのだ。米——即ち物価が二倍以上になっているということは、貨幣価値が二分の

一以下になっているということだ。同じ三十両でも、実質価値は十五両にしかならない。利殖にさとい上野介は、人をばかにしとるとむくれたかも知れない」
「なるほど、インフレの被害は、われわれも、ひしひしと思い当たる」
「つまり、内匠頭――というより、彼の重臣たちが、インフレーションを理解しなかったということが、内匠頭刃傷の根本原因だった――と、私は解釈していた」
「面白いじゃないか」
「ところが、そうではないのだ」
「勿体ぶらずに、本当の原因と思われるものを云ってくれ」
「上野介にしてみれば、実質価値の少ない謝礼金に不満を感じたことは確かだろうが、先刻も云った通り、そのために、常識をはずれた扱いを、内匠頭に対して、やったとは思われない」
「すると、何が原因で、内匠頭は上野介に斬りつけたのだ」
「宝永十一年の写本で、浅野吉良非喧嘩論というものがある。筆者は不明だ。同じ題名で、佐藤直方の門人の書いたものが、赤穂義人纂書第一巻に載っているが、内容は全く違うものだから、一緒にしないでくれ」
「どちらも見たことがないから、心配しないでくれ」
「筆者が不明なのは、内容が無責任なものか、非常に重大で筆禍を怖れたか、どちらかなのだが、

この場合は後者だと思う」

「そんなに重大なことが書いてあるのか」

「そうだ。あの時の刃傷は、吉良と浅野との喧嘩ではない。吉良が何事かを浅野に対して強要し、もしくは懇願していた。浅野は、それを拒絶したいのだが、どうしても拒絶し切れなくて懊悩（おうのう）していた。その悩みの結果、今でいう強度の神経衰弱にかかり、発作的に刃傷に及んだと云うのだ」

「その吉良が浅野に強要または懇望していたと云うのは、一体何なのだ」

「それが、はっきりは書いてない」

「それじゃ、何も分からないじゃないか」

「はっきりは書いてないが、推察することは不可能ではない。不明の筆者がはっきり書かなかったのは、それが単なる吉良と浅野の問題ではなく、その背後に、もっとはるかに大きな力が動いていたからなのだ。刃傷事件が起こった時、その巨大な力は、これを単なる浅野の意趣晴らしとして片づけようとし、背後にある一切の事実を封殺してしまった。忠臣蔵はこの秘密の上に成立したのだね」

「その巨大な力というのは何だね、一体」

「深く立ちこめた上層の黒い霧の中に動いていたその力の正体を明白にすることは、当時においてすら、困難だったのだ。まして、二百六、七十年も経った現在では、すこぶる困難だと思うが

ね。だが、できるだけ、確かな証拠にもとづいて、推理して行ってみよう」

二

「どうやらようやく本題に入ったようだな」
「まだまだ、その前に知っておかなければならないことがある。少し古い話だ」
「赤穂事件そのものが古い話じゃないのか」
「もう少し古い話だ」
「それが、刃傷事件に関係あるのか」
「大いにある——と、私は思う」
「よし、話してくれ」
「実は、それは、内匠頭長矩の居城である播州赤穂城が、どうして出来上がったかと云うことなのだ」
「あの城は、いつ頃出来たものかね」
「長矩の祖父に当たる内匠頭長直がこしらえたものだ」
「それまでは、赤穂には城がなかったのか」

「そうだ。内匠頭長直が、常陸真壁郡笠間城五万三千石から、赤穂に転封されたのが、正保二年、刃傷事件の五十六年前だ。その時まで赤穂は池田輝興が領していたが、発狂によって除封」
「徳川時代には、殿様の発狂が実に多いね、不思議なくらいだ」
「徳川実紀によると、妻を殺し、娘に傷を負わせ、侍女両人をも斬り捨てたと云う」
「むちゃだね」
「ちょっと調べてみたが、寛永十三年から、享保十年までの八十四年間に、狂疾という名目で廃絶の憂き目にあった大名が二十一件、つまり、四年に一人の大名が気狂いになって家を潰している。もっとも、表面上、狂疾となっているものでも、その実、公表し難い他の複雑な理由があったものもあるだろう」
「それにしても、大名というものは、ノイローゼや気狂いになりやすいものなのかな。何一つ不自由なく暮らしているくせに」
「それだからこそ、精神が少々おかしくなるのさ。生まれて以来、我がまま一杯に育てられ、早くから女色に耽溺し、酒に己れを忘れる習慣がついてしまう。何よりも自制力というものを喪ってしまうのが、一番危ないな」
「親族一門や、家庭のために、政策的に気狂い扱いされてしまうものもあるだろう」
「それはある、そんなことに興味があるなら、私の書いた大名廃絶録という本を見てくれ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com